若越郷土研究
37の1

福井藩お雇い教師ルセー

山下　英一

まえがき

ルセー(Alfred Lucy)について筆者は『グリフィスと福井』[注1]のなかで、福井の英学の伝統をつくった人としてルセーを書いた。そして「ルセーに対する人物評価は低かった」と述べたが、それには二つの理由があった。

一つは福井藩と交わした[注2]雇いの契約の更新がなかったことで、ルセーはそれを希望していたが、理由も分らないままに解雇された。しかし藩ではっきり言えない何かルセーに不利な理由があったのではないかと思われた。もう一つは明新館の学生であった勝山千百里[注3]の話である。「折も学校に西洋人を聘用したのは藩の明新館であった。こうして最初に来た者はルセイであった。ルセイの居る間にグリフィスが来た。グリフィスは神学博士の称号を有して居ったが、ルセイは木挽であったらしい。グリフィスの使者が陰口でルセイを木挽木挽と言っておった…。」木挽という言葉にどんな意味合いがあるのだろうか。

これだけの理由で簡単にルセーを評価しようとしたのは軽率であった。ルセーの名誉のためにもルセーその人を見直してかからなければいけないと思い始めた。うっかりしてグリフィスの陰になって、この明新館最初の外国人教師の存在が埋没されては歴史を見誤ることになる。

福井県立藤島高等学校『百三十年史』(一九八八年一一月刊)のなかで、お雇い英国人語学教師ルセーについて気の毒な評価しか与えられていない。これはしっかり書いておかないと『グリフィスと福井』のルセーだけでものを書かれては大変なことになると痛感した。

明治の日本の西洋教育に貢献した外国人教師の事蹟について調査研究を試みた最初の人は、自らもお雇い教師であったグリフィスであった。一九〇一年(明治三四)、ニューヨーク州イサカの教会で牧師をしていたグリフィスは、日本政府に雇われた外国人の調査に乗り出した。それは葉書による調査依頼だが、ザ・ヤトイ(THE YATOI)が日本人から忘れられた存在になり、その業績が日本史の上で無視されているのを見逃すことが出来なかった。しかし定着性の乏しいお雇いだけに調査は成果を生まなかったのは残念である。

一九二四年(大正一三)一二月七日、大日本文明協会は明治文化発祥記念会を組織して、その主な事業計画は、「明治初年以来日本に渡来し日本の新文明の建設に与って力あった諸外人の功績を顕彰せんとするのであった。」(「はしがき」)おそらくこうした目的をかかげた日本人による調査はこれが嚆矢であろう。会は『明治文化発祥記念誌』を出版して、「明治文化に寄与せる欧米人の略歴」(*Representative Foreigners Who Have Contributed in the Building Up Japan's New Civilization in Meiji Era*)として約四百名の名前、国籍、傭い期間、事蹟を表にして発表した。

しかし同じ「はしがき」で、ちょっと気に

なることがあった。「明治初年欧化万能の頃には、諸般の新しき学問を得るためには、その師としての人選などは極めて杜撰なるものであったといふことである。例へば英語の出来る人と見れば、その人格の問題などには何等頓着なく師として英語の教へを乞ふといふが如きものであったといふが、従って多くの新日本の文明の建設に与った外人中にも種々なるものがあったのである。」

事実そういう例もあったろうが、グリフィスはこうはしなかった、個々人の功罪を問わず、公平に依頼している。ルセーはいうまでもない。なぜなら横浜で医師で宣教師のヘボン及び宣教師ブラウンを知り、かつフルベッキ[注4]の斡旋をうけて福井藩に雇われた人物である。先の大日本文明協会の記念誌にはルセーの名はないが、もし杜撰な人選の一人と考えられては大変である。

ルセーはグリフィスとほとんど同じ年齢[注5]と思われる。一八七〇年(明治三)、福井に来た時、二六歳であったろう。翌年二八歳のグリフィスがやってきた。幸いに福井当時のグリフィスの日記、手紙が現存しているので、そこからグリフィスの見たルセーの生活が浮んでこよう。

次にルセーに習った学生の一人で、雨森(当時、松原)信成の見た教師ルセーを小泉八雲(ラフカディオ　ハーン)の文章[注6]で知り、最後はルセーがグリフィスに送った三通[注7]の手紙によって、その人格を考えてみたい。

グリフィス日記及び手紙のなかのルセー

二人の出会いは一八七一年(明治四)三月一〇日の夜、食事を共にした。ルセーは「福井藩学校に於て語学及諸学科伝習のため教師たらん事相違無之事」[注8]となっているが、英語に和訳を加えて教授することのできる、当時少ない外国人の一人であった。ルセーは福井に来て九カ月を過していたが、グリフィスが福井に着いた三月四日には福井をしばらく離れて横浜にいたらしく、「英語教師のルセー氏は二日前の夜、福井にもどりました。氏は昨年の八月から福井に来ています。年は私ぐらいで青白い顔のおとなしそうな青年ですが、頭に知識がいっぱいつまった抜け目のない人です。日本に五年いたので日本語を流暢に話します。」と初対面の印象を故郷の姉マーガレットへ書き送っている。

その後、ルセーの福井を出る六月三〇日までの四カ月あまり、二人はしばしば外出して、城下、寺、神社、墓地、祭を見物、奥越の鉱山、松岡の瓦工場、カリフォルニア産の牛を見に馬で出かけている。とはいっても「ルセー氏はあまり外出しません。せいぜい田舎や郊外へ銃猟に行くだけですが、私は毎日、町に出ます。ここの人々の生活を見たり、習慣や特色を研究します。私は町の生活の明暗の下での日本人の持って生れた性格は見飽きがしません。」と姉へ書く。

というわけだから、いろんな点でグリフィスの趣味に一致せず、意見が合わず、ルセーに賛成できないこともグリフィスには多くあって、住む世界が違うのだと割り切っている。趣味というと、ルセーは申し分のない野菜畑を作り、彼からもらった種から、レタス、ラディッシュ、カンクロープ、スイカ、キャベツ、カリフラワ、マメ、スカッシュ、キュウリ、リママメがグリフィスの菜園をにぎわした。また福井の土地が絹糸をとるのに絶好と

にらんだルセーは、蚕からまゆ作りを始め、二千ドルの収入を当て込んだ蚕が病気にかかってかえって損をした。私生活ではルセーに仮の妻（洋妾）がいたが、グリフィスの来る直前に、その妻を家から出していたことをグリフィスは知り「日本にいる百人の独身者の九九人までがそうだ」と姉に伝えている。こういうこともあってか、グリフィスの耳にルセーの教師としての能力と誠実についてのずいぶん聞き捨てならぬ証言が入ってきていた。

考え方が全く違うといっても、福井藩庁と話し合う時は二人はつねに心を一つにして対応した。藩の提供するヨーロッパ風の家の土地選びや、藩知事の別荘へ夕食に招かれていっしょに行った時など、藩の主だった役人らと改良すべき点や新しい文明の知識の話や学校の仕事などについての話し合いでは、意見を異にすることはなかった。[注9]

ルセー〔Alfred Lucy〕
（福井市立郷土歴史博物館蔵）

六月七日のグリフィスの日記によると、「ルセー氏がかなりふさいでいた。」グリフィスは六月一五日、斎藤敏、千本久信、三岡八郎を夕食に招いたのもルセーのことでの相談であったと思われる。その夜、ルセーと一二時まで話している。姉宛の手紙で書く。「ルセー氏は契約が更新されないのにすっかり気落ちしています。少なくともう一年当てにしていたのに。確かに収入なしに知らない国を漂うのはつらいことです。彼の俸給は年二、四〇〇ドルで、八〇〇ドルの生活費をとった残りの一、六〇〇ドルは昔の借金と「馬」（女の俗語）に払いました。しかし冗談にもならない実際のことで、気の毒です。私とうまが合うわけではありませんが、彼は愉快な、人づき合いのよい、気楽に折あいよくやっていける男です。」[注10]

六月二〇日、ルセーの注文した本が着いた。七〇〇ドル分の本の山にグリフィスは感嘆した。二六日、ルセーが日本人はその場限りで、本当のことを云わないと腹を立てていると記して、我々（外国人）の体面の感覚は日本では必ず侮辱されるとグリフィスは一般に西洋と日本の社会感覚の較差について考えざるを得なかった。ついに江戸から郵便で七月二日で切れる契約の更新はなされないとの知らせを受ける。たしかにルセーを解雇にした福井藩の事情はグリフィスの日記及び手紙からだけでは十分に言い尽せない。

ルセーの去った日のことは日記にも手紙にも残っているが、ここでは日記から引用したい。「六月三十日　金曜日　今日、ルセー氏が福井を去った。六時に起きた。朝食後、馬に乗って、ルセー氏と出かけた。カメ（ルセー氏の召使）とその妻、私の年とった料理番ミノスケとその妻とに別れを告げた。学校からは斎藤、佐々木、田川の三人に、佐々木、岩淵、私、井上、ドンキホーテ（白い服に長靴の）と二人の役人が馬に乗った。召使二人とその妻は駕籠に乗り、ルセー氏の荷物は荷馬にのせた。学生十二人が茶屋まで一里の距離

を歩いた。三里行ったところでルセー氏に別れを告げて、福井へもどった。」手紙にはルセー氏との友情は楽しく有益であった、最良の友として別れたと書き、ルセー氏とその妻、横浜からグリフィスについて来た片目の犬も去っていったことが分った。「今、外国産で自然の生きものは、私の自国の花とロッキー山脈の町クレストンで少女から買ったサボテンだけです。」と、ルセーが去って少しも淋しいとは思わないと書きながら、最愛の姉へ感傷的になっていた。

東京にいるルセーからの手紙が着いたのが八月四日、それによるとルセーは米国経由で帰国するつもりらしい。もし彼がフィラデルフィアに来たら、一晩泊めてあげてほしいと頼み、「そうすれば姉さんはルセー氏を「福井」のポンプの一つに利用して、この場所についてあらゆる事実を汲み出すことができます。ルセー氏はそれをバラ色に塗るとは思いません。少くともこの冬、横浜で会った時は、私にそういうことはしませんでした。ルセー氏は福井でよく働きました。彼は契約が更新されないと知り驚くばかりでした。だから彼は福井や福井の人のことを好意的に話さないでしょう。けれどもお願いですから、できるだけ親切にしてあげてください。彼と私はいつも互いにすばらしくうまくいっていたのですから。現在、ルセー氏は外国人居留地に家を構えて、学校を開いています。」（八月一八日付）

欧風化の波は福井の風俗にも及んできて、青少年の服装や整髪が欧風化しながら、ときどきちょんまげを残して上着とズボンを着けていたり、米国人と同じ身なりをしているのに下駄をはいて歩くこっけいな風景を見るにつけ、三年もたたないうちにこれらの青少年はすべて髪を切て、洋服を着るようになるだろうと評していたルセーのことをグリフィスは思い出していた。

『保守主義者』の英国人教師ルセー

ハーンの『心　KOKORO』は「詩人、学者、そして愛国者なる我が友人、雨森信成」へ献呈されていて、その第一〇章の『保守主義者』（*A Conservative*）は雨森信成がモデルである。これはグリフィスへの雨森[注11]の手紙（一九〇四年一二月二一日付）で明らかになった。ここでルセーに関してその手紙の一部を引用すると、「私はこれまで波瀾に富んだ人生を送ってきました。ところでここだけの話ですが、なつかしい先生なので申しあげます。おそらくよろこんでいただけるでしょうが、私は友人の故ラフカディオ・ハーンの「心」（これは私に捧げられた）の中の論文*A Conservative*の本人なのです。この中でハーンが話している英国人の先生はアルフレッドルセー先生で、きっと憶えていらっしゃると思います。もちろん、ハーンなりに話の大要を潤色しています。それはご承知のように出来事を理想化するためですが、大体のところこの論文はある時期までの私の人生の歴史を物語っています。」というわけである。

雨森はもう一通の手紙（一九〇五年四月二〇日付）で、グリフィスの質問に答えて、「ルセー先生について最後に聞いたのは、彼は日本の北部で農場主になっているということです。」と書いている。このことについては後で述べることにして、まず『保守主義者』[注12]から英国人教師ルセーの部分を読んでみよう。

（原文の漢字は新字体に改めた―筆者）

山下　福井藩お雇い教師ルセー

城下の若武士達は、間もなく西洋人を見る機会を得た。それは藩侯に依って、彼等の為めに召し抱へられた教師で英国人であった。彼は藩兵に護衛せられて来た。そして名士として彼を厚遇せよとの命が下った。彼は木版画の外国人の様に、全く醜くはなかった。尤も毛は赤く眼の色は変って居た。併し顔はさういやな顔ではなかった。彼は直に倦まざる観察の目標となり、又永くさうであった。どれ程彼の一挙一動が注視せられたかは、西洋人に関する明治以前の珍妙な迷信を知らぬ者には推測されない。西洋人は知的で恐ろしい動物と考へられたが、一般に普通の人間とは思はれなかった。彼等は人間よりも、寧ろ動物に近いものと考へられた。彼等の身体は毛深く珍奇な形態を有し、歯は人間の歯とは異なり、内蔵は特殊なもので、道念は魔物の道念であると考へられた。武士(サムライ)はさうでもないが、民衆が外人を見て畏懼したのは、形態上からではなく、迷信からの恐怖であった。日本人は農民でも決して臆病ではなかったのである。併し彼が当時の外人に対する感情を知るには、日支両国に共通であった、超自然力を備へて、人間の形態を装ひ得る動物に就て、又は半人半神の動物の存在、又は古い絵本にある荒唐な動物ー脚の長い、手の長い、そして髯のある怪物（足長手長）で、怪談の挿絵に描かれたり、或は北斎の筆で滑稽に描かれたりして居るものに就ての、古い信念を若干知悉することを要する。実際新来の異人等の容貌は、支那のあるヘロドタスに依って語られた架空談に確證を与ふる様に見え、彼等が着けた衣服は、人間ならぬ部分を隠蔽する為めに、考案された様に思はれたのである。それで新来の英国人教師は、幸にも、自分は其事実を知らずに居たが、珍獣を観察する様な態度で内々観察されて居た。それにも拘らず、学生からはただ鄭重に礼遇されて居た。彼等は『師に対しては影を踏むこともならぬ』と教ふる支那の経典に従って彼を遇した。兎に角武士(サムライ)の学生には、師が苟くも教へ能ふ限りは、其完全に人間たると否とは問題でなかった。義経は天狗から剣法を授けられたのである。其外、人間ならぬ者が学者であり、詩人であった例がある。

併し礼節の假面を少しも外づさずに、外人教師の習性を精細に視察された。そして其視察を比較しあって、出来た最終の判断は全く喜ばしいものではなかった。教師自身は両刀手挟んだ弟子達から、己にどんな評釈が下されたかは夢想だも為し得なかった。又教室で作文を監督して居る中に、つぎのやうな会話の行はれて居るのを了解し得たとて、彼が心の平和は増進される事はなかったらう。―『彼(あ)の肉の色を見給へ、柔らかさうでないか。造作もなく一撃で首は落ちるだらう』

或る時彼は、彼等の相撲の取り方を試みさせられた。それはただ慰みの為めと彼は想像した。併し実は彼等が彼の体力を測る企てであった。そして彼は力士として高い評価を贏ち得なかった。『腕は確かに強い』一人が云った。『併し腕を使ふ時、身体の使ひ方を知らぬ。そして腰が甚だ弱い。片附けるのに骨は折れぬ』

『外国人と』他の一人が云った。『戦ふの

は楽だと思ふ』

『剣で戦ふのは楽だらう』と一人が答へた。『併し彼等は、鉄砲や大砲の使用法は、我々よりも上手だよ』

『我々だって上手になれるさ』最初の一人が云った。『西洋の戦法に習って仕舞へば洋兵は恐るゝに足らん』

『外人は』もう一人が云った。『我々の様に丈夫でない。直ぐ疲れる、そして寒気に弱い。我々の先生も冬中室にどっさり火をおこして置くぢゃないか。我々は五分間と其処に居ると頭痛がして来る』

こんな事があるにも拘らず、若者等は教師に対しては親切であったので、教師も彼等を愛した。

もっともこの逸話からルセーの授業の内容はほとんど不明だが、騒然としていながら地方の青少年が初めて接する唐人（と外国人は呼ばれていた）への好奇の目に満ちた教室を想像することができよう。そういうなかにあって、松原（雨森）のようにルセーから熱心に英語を学んでいた者もあった。グリフィスの手紙に「七人の若い僧がルセー氏から英語、私から化学を熱心に習っています。」といった文にもそれが垣間見られる。後にグリフィスの『皇国』執筆を助けた俊才今立吐酔もこの僧侶の一人であった。そして奇才松原は誰よりもこれら外国人から西洋文化を身体で受けとめていったタイプの青年で、夏休み明けの九月に入って、横浜へ出て行く時、すでにルセーとグリフィスの両先生から知ったと思われる宣教師ブラウンの学校が目標であった。

絵から抜け出たのではない生身の外人を前にして、何かして試してみたい少年の無邪気な揶揄が生じるのは自然だったろう。西洋人との相撲の場面は力（体の）と力（武の）の少年らしい対抗意識であったが、ハーンはそこに西洋文化の力と武士道精神の相克も暗示していたかも知れない。しかし実際はルセーは腰抜けではなく、後に岩手の牧場で仕事をすることになって、外国で普通の草刈鎌を使うだけの体力もないと日本人労働者を見ていた。それはともかく、教師自身は学生から自分にどんな評釈が下されたかは夢想だにしなかったというが、グリフィスへの手紙でルセーは「雨森が最初にあった外国人をどう思ったか知りたい」とも書いた。そして更に、「（我々の少年たち）のだれが日本の偉大な覚醒のなかで名をあげているかを知りたい。」とも。このことは『保守主義者』からのこの跋文の最後の「こんな事があるにも拘らず、若者等を教師に対しては親切であったので、教師も彼等を愛した。」の真実を雄弁に物語っているだろう。

グリフィスに送ったルセーの手紙

「まえがき」で三通の手紙を紹介したが「南部」からの第一の手紙は全文を紹介し、あとの「南アフリカ」からの二通はこの論文に必要な箇所だけを紹介することにする。

グリフィス様　一八七二年一二月二九日

貴兄から拝受した手紙に、日本紙に鉛筆の走り書き（一八七二年一二月九日付）で失礼しましたが、家からの手紙を転送していただいたお礼を書き忘れていました。どうもありがとうございました。

私あての手紙がありましたら、これからも転送していただければうれしいです。

日本のこの地方にしては、非常に温和な季節を過しています。一一月一〇日に雪が降りましたが、降っては解けのくり返しで、今日は南風が吹いて、雪も霜もどんどん消えてその跡形もありません。一週間前に浅い池が一面に凍って、その上を人が渡りました。普通は一晩で固く凍りますが、昼、陽が照ると急速に融けます。北風のあたる日陰は融けません。

普段に吹く風は南西風で、一月はこれまで以上に厳しい寒気になりそうです。

農場のあるところは海岸に接し、長さ約三五マイルの平坦な海側の台地で、奥地に深く続いています。北は横浜と呼ぶ連山とその向うに田名部山脈があります。北西は青森あたりの丘陵地ですが、そこへは道一本ついていません。

平地の道路には半里ごとに主要な場所への距離を示めす標柱があるだけです。私は八戸から二五マイルのところにいます。半マイル先の森に六軒の農家があり、その村の名を谷地頭といいます。そこは八戸から田名部へ径が通じるところで、追放された会津人がすんでいます。一マイル先の道のないところに山中と呼ぶもう一つの都市(!!)があり、会津人の農家六軒があります。どの家も南に向いていて、西南の方角に居間、西北に貯蔵部屋があります。普通、真中に台所と仕事場があり、東の方角に家畜がいます。平均一〇―一二頭の馬、乳牛、牡牛です。屋根は藁ぶきで、炉は床の穴です。紙障子のぜいたくを犯している家が少しあります。冬は家を閉めきって、炉辺に坐り、ただ酒を飲み、食べているだけだそうです。多くの人が煙で目をやられます。この地方は桑が生い茂っていますが、紙は作っていません。米はぜいたく品で、酒は必需品です。たばこもそうで、上手に栽培しています。主食は稗、粟、黍、蕎です。

麦は痩せています。碾臼は手でまわします。八戸で一番の商売は平たく円い(江戸では丸い)餅で、市(マーケット)から酒を飲んで帰る時の家族へのみやげに農夫はこれを買います。

良い種も利益になるでしょう。農夫は何でもよく育つように除草しておこうとはしません。しかし肥料は惜しみません。農具は江戸で使われているのとあまり違いませんが、彼らにも西洋の農具の便利なことが分かり、冬、八戸の鍛冶屋は我々が仕事に使う道具をいくつか作ってくれましたが、それは作り賃よりも作り方を習うためでした。

大工も同じ目的で、同じ時期にやってきます。我々は二輪荷車、まぐわ、手押し二輪車、鋤、またぐわなどを作ります。犂、ハロオ、去勢牛の引く大まぐわはここですでに作られていて、他の多くの小道具と同様に見事な出来映えです。

外国の普通の草刈鎌は使うだけの体力も要領もないので扱いきれません。2フィート型は彼らに重すぎると分かりました。

もちろん下層階級間の教育は不十分です。私の期待する宗教は未知で、むしろ最も未開の状態です。最近、結婚がたくさんありました。もちろん我々は花嫁たちの健康を祝して酒で乾杯をしなければなりませんでした。酒から酒は北カロライナ知事かペトロリアム ヴィナスビーに似合ったでしょう。花嫁の一人は約八マイル先から、朝の

山下　福井藩お雇い教師ルセー

暗いうちに馬の背に乗って出発し、運ばれてきました。その夜は酒を飲んで過し、次の日も同じで、花婿は台所で給仕します。その夜は花嫁の奪い合いがあって、それは花嫁がいっしょに寝る機会です。そのあと彼らは夫婦になったと見做され、花婿はその花嫁だけを所有するものと考えられます。この習慣はたしかに先に述べた二つの村の例で、それがどのくらい広まっているかは分かりません。

人のことはこれくらいにして、今度は自分のことを少し。二カ月ほど前、八戸で投函した貴兄への最初の手紙で、蛇口山水という名の活動的な男のことを書きましたが、私に八戸で学校を始めてほしいといいました。

政府の費用で八戸に学校を設立する認可がおりたと信じます。ここでは私なしには何もやれないので、小さな組織ができ次第、多分また教える仕事につくでしょう。もし私が任命されることになると、江戸の文部大臣の承認がいることになると思います。青森か、ここからだと青森よりも約八里も遠い弘前に学校を始めようとしています。青森には以前から学校がありました。最初に大と小の両方があり、大は小から始めていかなければなりませんが、これは大学校になる予定です。

月給は高いとは思いませんが、もし学校が盛んになれば間違いなく月給は上るでしょう。私の日本語の勉強はよく憶えることと、手のあいている時はヘボンの和英語林集成とホフマンの日本語文法、いろんな話題を話す訓練のおかげで進歩しています。

もしヘボン博士が横浜においでなら、どうぞよろしくお伝えください。ヘボン夫人にも。

世界の出来事について何か情報、例えばジュネーヴ決断やアラバマ要求のような情報を送ってくれませんか。私はそういうことに暗く、貴兄の外に約三カ月、一通の手紙を受け取っていません。貴兄の手紙は江戸から普通一〇―一二日で青森にとどきます。しかし私の手紙がいつとどくのかどうか知りたくて仕方がありません。もしとどかないなら、貴兄から何も期待しませんが、もしとどくなら、またご面倒でもお手紙がいただけたらと思います。

私はこの地方の説明で、八戸まで二五マイルの道程にある町を列挙するのを忘れていました。一里の所、根井村、六軒。三里の所、三沢、約一五軒。六里半の所、百石、二五軒、七里半の所、市川、二〇軒。市川と八戸の間二里半の所に数件ずつ散在しています。

農家は用心深く平野を避け、普通は森の真ん中に家を建て、土地を開墾し、木を伐採し、地株はそのまま腐らせて肥料にします。

魚油を精製する良い方法とその過程で何を直すかその心得を教えてくれませんか。

米国ではどんな方法で炭酸カリを作りますか。戸外や炉で木を燃やし、次にその灰を水につけたあと、水分を抜くだけでいいのですか。そういうふうにしてみましたが、どういうわけか少量しかとれませんでした。

手紙を二通同封しました。投函してくださるとありがたいです。貴兄への払いもどしに郵便代五〇セントを同封しました。英

国への一通おそらく郵便代は倍かかるでしょう

敬具

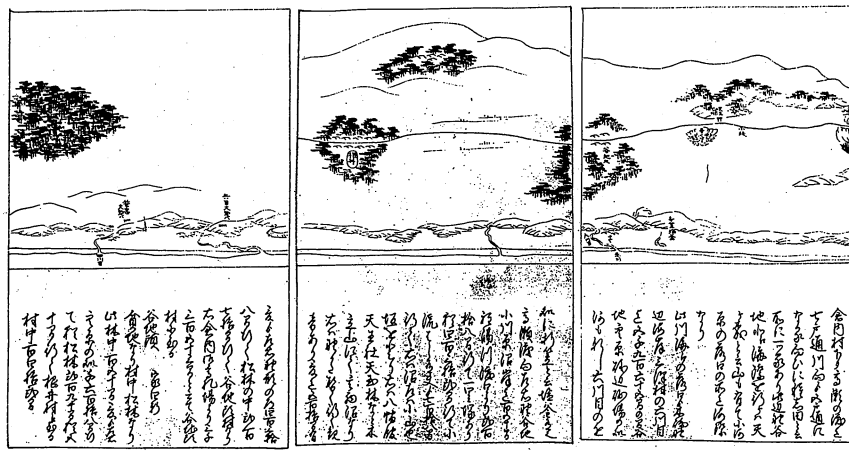
アルフレッド　ルセー

大学南校

W E グリフィス様

私事になるが、一九九〇年夏、筆者は米国ラトガース大学図書館の文書室でグリフィス・コレクションを調べていて、この手紙に初めて気が付いた。ルセーの南アフリカからの二通の手紙はすでに読んでいたが、日本滞在中のしかも福井を出されてからのルセーの足跡については殆んど手がかりがなかっただけに、この手紙の存在は貴重であり喜びであった。

拙著『グリフィスと福井』の執筆中にルセーのことで、今から一四年前に青森県三沢市教育委員会から資料をいただいた。そのなかの[注13]『三沢市史』にはルセーを雇入れた[注14]広沢安任の著書[注15]『開牧五年紀事』からの引用があり、それによるとルセーとマキノンの両英国人は一八七二年（明治五）六月一八日、陸路東京を出発し、七月八日青森県の支庁七戸に着く。牧場になる谷地頭（ヤチガシラ）には同年八月一一日であった。ルセーの手紙は同年一二月二九日であるから、まだ半年とたっていないが、マキノンのことには触れず、すでに教師の話が持掛けられている。月給[注17]一二五ドルの五カ年契約を、三カ年後の一八七四年（明治七）四月六日、ルセーが条約を解いて独り去って行った訳が想像される。



[注16]谷地頭、根井のある略図

広沢によればルセーは「書生より起て学問も出来、到る処先生と呼ばれ其交際も此に準じたり」、マキノンは「真箇の農夫、容貌言語共に鄙也。然れども幼より勉強に耐へ一二歳より能く自己の力に食て身体を保つを得たり。日本に来り横浜に在て馬車屋の働きをなす。」この二人はしばしば意見が合わず、「互に抵抗力を出し争ひ日に止まず、或は対椅三日語を接せず、ルセー出で牧場に在て後にマキノンの来るを見れば避け去り、或は二人の指命する趣各異にして傭夫業に就く能はず、」という状態になったという。（『開牧五年紀事』）

そこで二人の分掌を定めることにして、ルセーは牧事関係の補助や執算・測量・翻訳に

山下　福井藩お雇い教師ルセー

当たり、マキノンは菜圃の耕植・牛馬の牧養・器械の修理、このための人夫賃などを支払うことになった。

手紙のなかに追放された会津人の農家のことがでてくるが、筆者は『柴五郎の遺書』[注18]という文章を読み涙したことを思い出した。柴は会津藩上級武士の家に生れ、幼少にして斗南藩の暮らしで辛酸を嘗めた、後の陸軍大将である。兄の四朗は『佳人之奇遇』の著者として有名である。実はこの英語に堪能の四朗は広沢の牧場のために、ルセーとマキノンの通訳として斗南に来たことがあった。

その遺書のなかからその農家の有り様を描いた部分を書き写して参考に供しよう。

余の一家は働き手の太一郎兄不在のため、翌年春まで向町の工藤林蔵の空家を借用せり。間口三間ばかりの店造りにて、六畳の二階と炉のある十畳ばかりの台所兼用の板敷と、屋後に納屋あり。建具あれど畳なく、障子あれど貼るべき紙なし。板敷には蓆を敷き、骨ばかりなる障子には米俵等を藁縄にて縛りつけ戸障子の代用とし、炉に焚火して寒気をしのがんとせるも、陸奥湾より吹きつくる北風強く部屋を吹き抜け、炉辺にありても氷点下十度十五度なり。炊きたる粥も石のごとく凍り、これを解かして啜る。衣服は凍死をまぬがれる程度なれば、幼き余は冬期間四十日ほど熱病に罹りたるも、褥なければ米俵にもぐりて苦しめらる。

『ある明治人の記録』六二頁。

最後にグリフィスへ送ったルセーの南フランス、トランスバール州バーバントンの金鉱の町からの二通の手紙だが、それによると南部と函館でマラリア熱にかかり、一八七五年（明治八）英国へ帰った。しかし一八八七年（明治二〇）両親の死後、アフリカへ渡ったという。気候が良くて英国へもどる気はない。月に四、五〇〇ポンドの金を産出する金鉱と四四エーカーの農場の所有者である。旅に出れるなら、もう一度、日本を見たい。グリフィス著の *The Mikado's Empire* と *The Japanese Nation in Evolution* も買って読んでいる。とくに前者[注19]にはルセーは自分の名を見つけてよろこんだ。

そして彼のことを書くなら、思い出してほしいことがあると云って、グリフィスと福井へ導入した石版印刷機とひらがな印刷のこと、ルセーが武士（サムライ）に茶の栽培と絹生産を始めて、これを輸出して藩にドルを入れるよう話したこと、そのために武士に六年間の手当を与えて、この産業を始めさせて、武士が独立できるようになることを主張したことなどであった。

福井でいちばん会いたい人は医者[注20]の橋本であると書いた。宣教師ヘボン博士、ブラウン、フルベッキはまだ生存しているか。お雇い外国人教師ブリンクリー、ミルン、アーノルドらは日本の女性と結婚していると思う。日本の女性はこちらに来ているオランダの女性より節操があり、良い夫人になるだろうと結んでいた。ルセーのいる町もオランダ人が多く移り住んでいて、オランダ語系方言のタール語が語られていた。この手紙のルセーは六四歳ぐらいの年令であったと推定されるが、はたしてどんな余生を送ったのだろう。

注1　福井県郷土新書5　一九七九年（昭和五四）八月刊。

2　「比約定は明治三年六月二日　西洋千八百七一年第六月三十日より翌年同月同日迄一年を期すべき事」(福井藩庁の代たる小笠原代参事君とアルフレッド ルセー君との左の約定取扱書　第五ケ條)。

3　『福井中学創立五十周年記念録』一九三一年(昭和六)勝山千百里談　勝山は福井中学で明治二二年―二五年、三一年―四二年、英語・地理・数学・博物を教えた。

4　(注2)の約定取扱書、第九ケ條「ルセー君病気之節六月期限迄奉職之見込み無之候得者フルヘッキ君へ引渡し可申事」

5　青森県『三沢市史』の「広沢牧場」八十頁に、「時にルセー年三十二、暫くプライキストンに依って函館に在りしが又辞して東京に赴けり」とあるのに見当をつけた。注13・14を参考せよ。

6　Lafcadio Hearn:『心』*KOKORO―Hints and Echoes of Japanese Inner Life*

7　その1。一八七二年(明治五)一二月二九日付。青森南部。
その2。一九〇八年(明治四一)八月一四日付。
南アフリカ、トランスバール、バーバートン。
その3。一九〇八年(明治四一)一一月八日付。
南アフリカ、トランスバール、バーバトン。
(米国ニュージャージ州立ラトガース大学図書館グリフィス・コレクション蔵。)

8　(注2)の約定取扱書、第一ケ條。

9　福井藩庁のグリフィスとの約定取扱書。第二ケ条、「一　福井藩庁よりグリフィス君へ欧羅巴形の建家を設け相渡すへし尤家財器具食料召遣等の儀は同人の関係たるへき事」

10　斎藤　敏(さとし)―少参事、明新館学校幹事。千本蒔右衛門久信―副参事。三岡八郎＝由利公正(一八七〇年以降)。「三岡は一八六八年の称賛に値する働きのために収入を受け、また長い間、福井における改革と国情にあった進歩の代表者であった。」(グリフィス著『皇国』)

11　「人間　雨森信成㈠」山下英一(「若越郷土研究第三十三巻四号、一九一号」)

12　戸沢正保訳(小泉八雲全集　第五巻昭和一二年刊家庭版、第一書房)

13　『三沢市史　下巻』(青森県三沢市、昭和四二年八月二五日発行)「広沢牧場」の記事。

14　一八三〇年(天保一)生れ。一八九一年(明治二四)歿。会津藩士。一八七〇年(明治三)、会津藩が下北半島斗南へ移封されると、少参事になり、廃藩置県後の一八七二年(明治五)、北部第七大区五小区百石村大字谷地頭地内の広原に牧場を開く。

15　『開牧五年記事』(著述人　広沢安任、青森県第弐蔵判章。発兌人、江島喜兵衛、東京日本橋区本石町二丁目九番地。明治一二年五月発行。木版)。

16　『北奥路程記』から谷地頭、根井のある略図。八戸工専の本田敏雄先生からいただいた資料で、年代は不祥だが幕末の

もので、活字化されていないと聞く。

17　外国人雇入条約（外務省）初条「皇暦明治五年壬申四月即ち西暦千八百七二年五月より来る丑年三月迄五ケ年の間陸奥地方牧畜繁殖の為の英人ルセー、マキノン両人雇入申すべき也。」

18　『ある明治人の記録―会津人柴五郎の遺書』石光真人編著（中公新書一九七一年五月発行）柴五郎―一八五九年（安政六）生れ。一九四五年（昭和二〇）に歿す。

19　福井藩が建てる計画の外国人の家についての原注「アルフレッド　ルセー氏という約二カ月間私といっしょに働いていたイギリス人は六月に福井を離れて、イギリス式農業と牧畜を教えに陸奥の青森へ行った。」

20　橋本綱維。一八四一年（天保一二）生れ、一八七八年（明治一一）歿。福井藩医橋本長綱の子で橋本左内はその兄である。弟綱常とともに藩命により長崎で蘭学をオランダ軍医ボードイン、オランダ人シントレルから学ぶ。福井藩医になってから一八六七年（慶応三）再び長崎でオランダ人マンスフィルトについて医学修行をした。